

長屋街の魅力と再生～空堀商店街界限～

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所 栗本智代

空堀の由来と歩み

石畳の坂道、石垣、本瓦葺き、長屋が対面する路地、そして商店街らしい商店街……。大阪には、こんな伝統的な住空間が残された地域がいくつかあり、空堀地域はその代表選手である。

現在「空堀」という名前をとどめる空堀商店街は、地下鉄の谷町六丁目駅や松屋町駅などを最寄りとし、上町筋から谷町筋を経て松屋町筋にいたる東西約八百メートルに連なるまさに都心の商店街であり、上町台地上から台地下へ向かう大きな坂道が独特の表情を楽しませてくれる。「空堀」の地名は、この東西の通りが豊臣秀吉の築造した大阪城の三の丸の外堀(「南総構堀(ルビ:みなみそうがまえぼり)」といった)であり、慶長十九(一六一四)年の大阪冬の陣後に徳川方に埋められてしまい空堀になったことに由来する。この界限は、江戸中期以降町家・長屋が立ち並び、明治年間以降、空堀地蔵の定期市を契機に、自然発生的に商店街として発展してきた。大正末には、道路幅を四メートルから六メートルへ拡張するため「軒切り」が行われ、現在の商店街の原型がつくられている。

幸いにも昭和二十年の大阪大空襲から奇跡的に逃れ、都心部では数少ない商業集積地として人々が集まり、同時に戦前からの町並みや暮らしが受け継がれることになった。坂道やゆるやかな曲線を描く道など起伏に富んだ地形により、商店街周辺のあちこちで古くからの町家の屋根の連なりを見下ろすことができる。少し横道にそれると、くねくねと折れ曲がった細い路地が続き、またもとの道にもどってくる。まるで迷路のようだ。路地裏にはお地蔵さんがあちこちに祀られてあり掃除が行き届いている。これら、商店街を含め、坂道、南北にめぐる路地や石畳の階段、そこに貼りついている長屋などが織り成すぬくもりのあるまちの表情が、この地域の大きな特徴だと言える。

町家・長屋の魅力再生

しかし、建物の老朽化や住民の高齢化に加え、特にバブル期からバブル崩壊後にかけて、古い町家や長屋がどんどん取り壊されていった。特に現行の建築法規では、道路に接していない(路地にしか面していない)敷地の家屋は建て替えができず、また道路に接している家屋についても取り壊した後、請負業者がマンションなどの新規建築物を建てる体力もなく放置するなど、あちこちに荒廃した更地が増えつつあるというのが実態であったという。古い長屋の空き部屋はなかなか埋まらず、若い子供世代はほとんどが他のまちへ出ていくという現実に対して、地元住民や大家さんなどは、古いまちの宿命だと受身的に捉えていた方も少なくなかったと聞く。

そんな中で、昔ながらの長屋や路地などの町並みが消えていくのを嘆き、なんとか保存再生していきたいという取り組みが、少しずつだが確実に根付いてきた。実際まちを歩くと、町家や長屋を改装した小さなお店、雑貨屋や喫茶・レストラン、ギャラリーやアトリエなどに気づく。それらは、この1～2年でかなり数が増えたように思われる。もともと

この界隈で育った方が幼い頃の原風景を大切に思い、あるいは町家・長屋の力を再認識して再生に成功した例もあり、一方で外から訪れた人が、このまちや長屋に心惹かれ、自らの居住の場として定めた事例もある。

< からほり倶楽部による長屋再生ムーブメント >

平成十三年四月「空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト」通称「からほり倶楽部」が立ち上がった。中心となって活動されている建築家の六波羅雅一さんは、十六年ほど前から空堀界隈のマンションを事務所兼住まいとして暮らしており、この界隈のあちこちにある良質の長屋建築や路地、石畳など、独特のまちの雰囲気魅せられ、カメラを持って散策するのを日々の楽しみにしていたが、一方で廃墟として崩れ落ちるまで放置されている建物や解体された後更地のままになっている場所などをみて心を痛めていたという。改修すれば維持できる建物は少なくないと考え、なんとか本来の建物自体の魅力を残していく活動として「からほり倶楽部」の運営にふみ切ったそうだ。

まずは、それまで居を構えていたマンションから長屋へと自身が引越し改修を手がけた。長屋を借り受けるまで大家さんの理解を得るのに非常に苦労したという。長屋街は、コミュニティが密なだけに、外来者に対して危機意識を持ちやすい傾向にある。なんとか家族で長屋暮らしを始めた六波羅さんは、その体験をもとに、次に長屋の改修（空き住戸の流通）と若いアーティストなどの需要への対応を目的に、長屋の所有者と入居希望者を結びつける物件説明会を開催。「からほり倶楽部」は、立ち上げ当初は数名であったのが、建築や不動産、広報のプロからボランティアまで地域内外の参画者が増え、まちづくりを楽しもうという気運が出てきたという。そして、初年度の秋から、「アートイベント」を仕掛け、路地や坂道などの空間を舞台にアートの展示を行い、結果として数千人の動員となった。この界隈には、陶芸家や写真家、デザイナー、画家、建築家ほか、各分野のアーティストが移り住んで、独自で改造した工房やアトリエで創作活動を行っていたため、街自体に新たな創作意欲をかきたてる何かがあると「アート」をテーマすることが発案されたという。「当初は地元の方の理解を得るのが大変でしたが、マスコミにも取り上げていただき大勢の人々に注目されるだけの魅力がこのまちにあるのだと、地元の方の意識が変わってきました」と六波羅さん。（このアートイベントは「からほりまちアート」と題し、その後も毎年開催し、当日は一万人以上の来街者で賑わいを見せている。）

活動を立ち上げて二年目の夏、平成十四年七月に「長屋再生複合ショップ惣（ルビ：そう）」がオープン。もともと老朽化が進んだ長屋を解体して駐車場にする計画であったのを、交渉により「からほり倶楽部」が借り受け、複合店舗として入居者を募集することを提案。本来であれば長屋の二重貸しになるので嫌がる大家さんが多いのだが、からほり倶楽部の志に理解を得ることができ、この試みが実現した。改修・改装の工事は、予想以上に家屋の傷みが激しく難航したが、からほり倶楽部のメンバーの専門性や店主たちのこだわりが生かされ、さらにボランティア、近所の人などの協力により完成した。二軒長屋に5つの店が仲良く自然につながる複合ショップに仕上がっている。ペットグッズ、和雑貨、カフェギャラリー、パワーストーンズに手作り雑貨と並ぶが、営業のプロではなくそれまで出店経験がない店主などが選ばれ、チャレンジできる場としても意味付けた。「惣」のオープンにより、からほり倶楽部の活動がひろく地域に知られるようになった。この小さな商業

施設がオープンするまでは、個人宅の長屋再生が中心であったのが、「惣」によりはじめて一般の人が、再生された長屋空間を体験する機会ができ、からほり倶楽部の活動やその成果である「場」が地域や人に開かれたといえる。さらに、平成十五年二月には、お屋敷再生複合ショップ「練(ルビ:れん)」もオープンした。チョコレート、眼鏡、着物、クレープ屋さんなど現在十二店舗の飲食店・物販店が営業している。“和”と“洋”、“古”と“新”を練りこませることで、新たな再生を目指したいという思いをこめた「練」というネーミング。この建物はもとは神戸の舞子に建築された宮家の別荘であったが、大正末期に空堀近くの現在の場所に移築された。大きな母屋に蔵がついた屋敷である。からほり倶楽部は、「惣」の再生を足がかりに、改修の際、各店主自身で可能な範囲で空間づくりを行うセルフビルド方式をとり、空間構成としては、アプローチをオープンスペースとして共有させ、各店舗に長屋的なつながりを持たせている。チャレンジショップも一画で店を広げている。「惣」と「練」の取り組みは、からほり倶楽部の活動や志の象徴として、まちに開かれ発信を続けている。

住まいの博物館としての空堀

からほり倶楽部の活動や発信などにより、空堀商店街界隈は各メディアに紹介され、建築家や若いアーティスト・クリエイターなどの関心をより集める地域となった。実際、足を運ぶだけでなく移り住む若い人たちが増えていると聞く。ただそれよりかなり前からこの界隈の町家や長屋にたいして、規模の大小を問わず維持・再生を試みている事例は少なくない。昔ながらの家屋やコミュニティがそのまま保存されているところも多く、長屋が新旧それぞれの仕様で共存している空堀地域は、今を象徴する生きた住まいの博物館であるといえよう

それがもっとも顕著に見てとれるのが、御祓い筋(ルビ:おはらいすじ)であろう。谷町筋と松屋町筋の間で、北は長堀通りから空堀商店街にかけて南北に貫く通りを人々はそう呼ぶ。長堀通り側からつまり北から南へ歩いていくと、まず和の生地を活かしたバックが並ぶ「菱屋カレンプロッソ」のショーウィンドウが目にとまる。粋な色づかいにはっとさせられるが、紛れもなく改装長屋であり新たな価値観で活用された先駆的事例である。その南向かいには、昔ながらの風情をとどめる「丸芳食堂」が建つ。老夫婦が営む麵処で懐かしいような雰囲気の中でうどんをすするとほっとさせられる。この四つ辻に向かい合う三軒が隅切り型の長屋として残っている。さらに南下すると、トンネルのようになった路地の入り口に「石丸会」と記された表札がある。この奥に迷路のように路地が続き長屋がはりついている。さらに南へ歩を進め、商店街に近づく。紅茶専門店「style」があり、一筋路地を西へいくと、陶芸工房とカレー・紅茶喫茶のお店「心裸(しんら)」がある。地元で陶芸と紅茶店を営む岡田昌之さんが、築百年以上建つ三軒長屋を借り受け、当初はほとんどプロの手を借りずに友人に手伝ってもらいながらセルフビルドで改修を行った。仕事の場を広げるのと同時に、幼い時から慣れ親しんだこの界隈の町家長屋を維持保存したいという思いが大きかったという。この岡田さんのセルフビルドの成功事例が、後に続くからほり倶楽部の活動の励ましにも参考にもなったという。現在も用途やニーズに応じ、改装を繰り返し、長屋独特の味わいをいかに生かすか創意工夫されている。

その他、この界限には、「兎玉湯」という看板をそのままに昔の銭湯の名残を大切にとどめた駐車場があったり、長屋を改装したパブや雑貨・工房などが新たに出現したりと、1つ1つは小さいながら手作り感溢れる自分流の空間づくりが行われており、まちが従来持っていた空気感に小さな波紋を投げかけつつうまく溶け込んでいる。

地元発・町家改修による場づくり～楓ギャラリーと陽だまり～

空堀のこの数年の変化に対して、“若者や新参加者がまちを変えている”という捉え方がされ勝ちである。確かにからほり倶楽部も外部のボランティアの方々の力が大きく、他の地域から移り住む比較的若い世代も増えているが、もともと空堀界限で生まれ育った地元の方が、町家をもつ力を再認識することによって手がけられた積極的な試みも、まちの懐をさらに深めている。

<楓ギャラリー>

谷町筋から東へ行くと、商店街に交差して北側に五十軒筋がある。この道沿いに「楓ギャラリー」がある。黒い板塀がめぐらされた町家の玄関口に入って石段を降りると、左手に画廊・展示室、右側に進むと庭園があり、いずれもギャラリー空間になっている。オーナーの三島啓子さんは、空堀近辺で生まれ育ったが、特に十数年前頃、周辺の長屋が見る間に壊されてまちが荒廃していく様を目の当たりにしたという。「まちの隙間にできた荒れた土地には、汚いものが捨てられ悲しいドラマが生まれる。そうではなく、いいドラマが生まれる場所であることが都市の責任ではないでしょうか」。三島さんは、家族の近くで静かに始められることはないかと考え、持ち家の一部を改装してアートギャラリーを開いた。表をガラス貼りにしたギャラリーが多い中、正面と庭を中心に景観を残そうと、今の状態になったという。ギャラリー横から路地が続くが、三島さんはその長屋の管理もされており、この楓ギャラリーを通じて出会った、クリエイティブな仕事に関わる方々に空き部屋を提供している。「画廊という“場”は人をつなぐ力をもっていますね」「お年よりだけでなく若い人も含めたいろんな世代が交じり合うのもいいなあ、それがまちの本来の姿だと思ったのです」。路地裏や長屋というのは、住まいとして不便な点が多少ありながらもアートや表現活動を孵化させる胎内のような温もりと刺激を与えてくれるようだ。この空堀独自の路地空間でも、演劇や美術関係ほか、若い表現者たちの活動があたためられている。

<町家改修型デイサービスセンター 陽だまり>

平成十五年三月、町家を改修したデイサービスセンター“陽だまり”がオープンした。場所は楓ギャラリーより二本ほど東へ行ったあたり。周辺にはこの地域ならではの細い路地や階段がめぐり町家が軒を連ねている。空堀商店街で寝具屋から介護・サービス事業を立ち上げた白石喜啓さんが新たに手がけたデイサービス事業である。「最近このまちの良さを再発見し、町家長屋を維持保存していきたいと認識を深めていた。」「介護サービスの事業をしていると、お年寄りを持つ家族の声が聞こえてくる。大規模なデイサービスではできない一人一人への丁寧な対応が、町家規模では提供できると考えました」。介護事業は地域からの信頼が大切でありご縁の力が大きかったと白石さんは語る。ちょうど質の高い

町家が空いていたため借り受け、からほり倶楽部のメンバーでもある建築家の山本一馬氏と松富謙一氏などに設計・協力を依頼した。そして、中庭を生かして光と風をふんだんに取り入れた、木造ならではのぬくもりある空間へと改修が実現したのである。定員は十名。まるで自分の家にいるように、床やソファでくつろいだり、テーブルで食事をしたり。お風呂も一人一人気分や体調にあわせてゆったりとつかることができるという。なごやかな雰囲気、突然の訪問者（筆者の場合も含め）に対しても、にこにこ「まあ座りなさいな」と椅子を進めてくれ、帰り際は手を振ってくれるお年寄りもいるほど。施設長の早川靖江さんは「いつもこんな感じで、のんびりマイペースで過ごしていただいています。お年寄りの方は、ずっとこのような木造の家で育ってきた方がほとんどで、精神的に落ち着かれるようですね。町家は夏は涼しくて気持ちいいですね。冬はさすがにすきま風などがありますが、あちこちに暖簾やカーテンなど手を加えていくと、手作り感でさらにわが家のようにあたたかい空間になりました」。

町家・長屋再生は、単なるブームではなく、地域に根付き、まちの持続可能な力を引き出す可能性を秘めていることを、空堀地域は教えてくれているようだ。